

「解答例」・「出題の意図」

選抜区分	平成31年度（選抜区分：一般後期） 経済学部（科目名：小論文）
<p>一般後期日程の小論文では、橘木俊詔著『新しい幸福論』（岩波新書、2016年）から一部を抜粋して課題文としました。この課題文は、経済成長と資源・環境問題の軽減・緩和が両立しないという（一方が実現すると他方が実現できないことを「トレード・オフ」の関係にあるといいます）、著者の主張が展開された箇所です。文中には、やや専門的な学説が紹介されていますが、専門的な知識を使わずとも、著者の主張の本質は理解することができます。また資源・環境問題という、高校生にとってもポピュラーなトピックを扱っている点で、取り組みやすい内容であると考えています。</p> <p>設問1および設問2は、課題文の内容を十分に理解した上で、制限された字数内で簡潔に要約する力を試す設問です。課題文の中で展開されている著者の主張の論理を理解することが求められます。設問3は、課題文の内容を踏まえたうえで、自身の考えを文章で論理的に表現する力を試す設問です。やや発展的な設問内容に思えるでしょうが、普段より経済や経営に関する社会問題に一定の関心を払っていれば、課題文の論理を読み取ることで確実に論じることができるはずです。</p> <h3>設問1の解答例</h3> <p>第1の論拠は、「見せびらかし」のための消費に対するヴェヴレンによる批判である。自分が上級階層にいるという優越感を、派手な消費によって他人に見せびらかすことは、ムダな消費として批判されてきた。第2の論拠は、「依存効果」による消費に対するガルブレイスによる批判である。周りにいる人の優雅な消費をうらやんで、自分も高い消費に走ろうとすることも、必要以上の消費を生むことから、批判の対象とされてきた。（196字）</p> <p>この設問では、課題文の中に示された「代表的な論拠」を、ピックアップし要約することが求められています。課題文には、2ページの12行目に「そのなかから代表的な論拠を二つ述べておこう」とあり、「第一は」（P2・13行目）、「第二は」（P3・2行目）と、二つの論拠の説明が始まる場所が指し示されています。この点に注目し、第一の論拠としてはソースティン・ヴェヴレンによる「見せびらかし」のための消費に対する批判を、第二の論拠としてはジョン・K・ガルブレイスによる「依存効果」による消費に対する批判を要約します。</p> <p>なお、ヴェヴレンの主張の後には、この主張をどうとらえるべきかという著者の解釈が追記されています（P2・23行目～P3・1行目）。またガルブレイスの主張の後には、ガルブレイスが特に問題視した事例が紹介されています（P3・9行目～14行目）。これらの部分は、あくまで「代表的な論拠」に対する補足説明という位置づけとなっていることに注意しましょう。200文字という限られた文字数で求められている内容を的確に記述するためには、どこからどこまでが主文にあたるのかを正しく理解し、補足説明を除いた主文のみを要約する必要があります。</p>	

設問 2 の解答例

生産には廃棄物が伴うため、生産量を増やせば廃棄物が増加し、地球温暖化や空気のよごれなどの環境問題を引き起こすことになる。一方、廃棄物の発生を抑制できる代替エネルギーは、現状においては高価である。したがって、これを用いれば、企業にとって高コストの負担となり、生産量を減らさざるを得なくなる。また、代替エネルギーの利用を抑え、その結果、エネルギー投入量が減っても、生産量が減少することとなるため。(196 文字)

この設問に解答するためには、生産量と環境への負荷が「トレード・オフ」の関係にあるという内容が、課題文のどの記述と対応しているのか理解できなければなりません。そのためには、まず本文にある「環境の悪化」「環境への負荷」が、課題文の 4 ページ 4 行目以降に記述されている廃棄物の発生という事実と対応していることを理解する必要があります。

特に著者は 4 ページの 16 行目以降、「エントロピーの法則」を引き合いに出し、生産の拡大というプラスの行いが、必ず廃棄物の発生というマイナスの結果を招くという点を強調しています。そのうえで原子力発電を例に、生産（エネルギーの消費）と環境への負荷（核のゴミの発生）が「トレード・オフ」の関係となる理由について論じています。これらの段落にポイントを絞り、以下の 3 点を抜き出し論理的に解説すれば、正しい解答を示すことができます。

- ①生産活動を行えば必ず廃棄物が発生する。
- ②廃棄物が出ない代替エネルギーを用いようにも、それは高価であるため企業にとって高コストとなり、結果として生産量が減少する。
- ③代替エネルギーを用いず、廃棄物をできるだけ出さないようにエネルギーの投入量を減らしても生産量が減少する。

限られた文字数で過不足なく解答をまとめるためには、問われている「理由」にあたらぬ文章は省き、上述の 3 点のみを要約する必要があります。また、本文の原子力発電に関する記述は、生産量と環境への負荷との関係をわかりやすく論じるうえでの具体例に過ぎません。設問は原子力発電に関する説明を求めているわけではないので、原子力発電に関する記述をもとに、その内容を一般論として論じなおす必要があります。

設問 3 の解答例

現在の生産活動は有限の天然資源を消費すると共に、廃棄物を生み出す。したがって、今後とも日本が成長路線を歩むとすれば、資源・環境問題の解決を目指した取り組みが必要となる。そのためには、有限の天然資源以外のエネルギー活用が必要となる。しかし、これに該当する風力や太陽光等のいわゆるクリーンエネルギーは、現状においては相対的に高コストであるため、コストを大幅に削減するための研究開発促進が必要となる。例えば、クリーンエネルギー

を研究する機関に対して資金を提供することが挙げられる。あるいは、クリーンエネルギー利用に補助金を出して、普及を支えることで研究開発を促すといったことも一つの方法であろう。ただし、どのような方法をとるにも、国民の幅広い費用負担が生じることとなる。ゆえに、現状で最も重要なのは、国民に対して開発費用を負担することのメリットを伝え、国民の理解を得ることである。(387文字)

設問3は、資源・環境問題を考慮すれば経済成長率を高くすることは不可能であるという考え方に反して、今後の日本が成長路線を歩むにはいかなる取り組みが必要かを考えてもらう設問です。この設問に対して的確に論じるために最も重要なことは、資源・環境問題の軽減ないし解決と、高い経済成長率との両立が、ある取り組みによって実現可能であることを論理的に示すことです。

このような取り組みが何であるかは、各受験生の考え方を尊重して、多様な解答が許容されます。とはいえ取り組みが示されれば何でも可というわけではなく、著者の主張である経済成長と資源・環境問題のトレード・オフ関係を踏まえ、それをいかに克服するかの視点が解答に現れていなければなりません。経済成長と資源・環境問題のいずれか一方を解決する取り組みでは解答として不適切であり、それらが両立する取り組みを示す必要があります。

たとえば、現実的かつ具体性のある取り組みとして、風力や太陽光などのクリーンエネルギーの活用を考えてみましょう。もちろん、環境負荷を軽減させるのでクリーンエネルギーを使うべきだと単純に記述するだけでは、解答として不十分といえます。現状において、クリーンエネルギーの活用は高いコストがかかるので、そのコストを低くするための取り組みも同時に考えなくてはなりません。そこでたとえば、コストを大幅に削減するための研究開発促進（企業に対する公的補助金の投入）といった取り組みも提示されてしかるべきです。もちろん補助金を出すとすればその財源はどうするかという問題にも言及できれば、なおよいと考えられます。

解答例では、一つの例としてクリーンエネルギーを取り上げていますが、全く別の切り口で論じることも十分に可能です。資源をあまり使わず環境負荷も小さい生産活動、例えばIT技術を用いたサービス産業の成長に力を入れるといったことを取り上げてよいでしょう。また、AI活用によって人々の生産効率を持続的に高めるための取り組みでもよいでしょう。設問に対して適切に論じられていることが重要であり、唯一の正答を求めているわけではありません。自身の考え方を適切に表現できることが大事です。